

2026 年度 獣医学研究科 博士課程 第 2 期入学試験問題
(必修：獣医ウイルス学)

【出題の意図】

北海道の HEV を題材に大学院生の知識を問う教育的意図として以下の点を述べる。

地域に根ざした One Health 実装者の「見立て・介入・説明・研究」総合力を評価し、現場で課題解決ができる専門職を育成する
対象：獣医大学院生（ウイルス感染症・公衆衛生・臨床・研究の横断）

要旨：HEV（E 型肝炎）は、食・畜産・野生動物・医療が交差する北海道の代表的な人獣共通感染症である。本テーマで知識を問うことは、地域実務に直結するリスク評価と介入設計、対象別コミュニケーション、根拠創出（研究）までを統合的に遂行できるかを評価し、感染症専門職を育成するうえで有効である。

1. 評価したい総合力（4 領域）

| | |
|--|---|
| 見立て（リスク評価・鑑別） ヒト急性肝炎の鑑別と、動物リザーバー・暴露経路（ブタ／ジビエ等）の統合判断 検査戦略（抗体＋HEV RNA、検体とタイミング、限界・不確実性）の理解 地域疫学（北海道の特徴）を踏まえた優先順位付け | 介入（予防・制御） 介入点の特定：農場→と畜→加工→流通→調理→喫食（交差汚染を含む） 具体策：十分加熱、衛生基準、教育、サーベイランス、輸血安全などの多層防御 関係機関連携：保健・衛生部局、食肉衛生、野生動物管理、医療 |
| 説明（リスクコミュニケーション） 対象別（狩猟者／処理・飲食／農場／市民／医療）に「行動に落ちる」説明ができる 過剰不安・過小評価を避ける表現（確率・不確実性の扱い、推奨の伝え方） 誤情報への対処と、合意形成（協力を得る言い回し） | 研究（根拠創出・再現性） サーベイランス・疫学設計（バイアス、陽性率と信頼区間の解釈） 分子疫学（遺伝子型／サブタイプ）の目的と限界、再現性・倫理の理解 結果を政策・現場手順へ翻訳（提言・SOP 化）できる |

2. リスクを理解する専門職育成に直結する理由

現場のリスクは「知識不足」よりも「誤った意思決定と伝達」で顕在化しやすい。HEV はその典型であり、総合力の訓練・評価に適する。HEV において理解する枠組み（見立て→介入→説明→検証）は、SFTS 等の他の人獣共通感染症にも汎用できる為。